

氏名(本籍地)	武藤伸司(東京都)		
学位の種類	博士(文学)		
報告・学位記番号	甲第357号(甲文第42号)		
学位記授与の日付	平成26年3月25日		
学位記授与の要件	本学学位規則第3条第1項該当		
学位論文題目	力動性としての時間意識 ー現象学と認知科学における時間意識の構成についてー		
論文審査委員	主査 教授	博士(学術)	河本英夫
	副査 教授	文学博士	村上勝三
	副査 教授		長島隆
	副査 客員教授	Ph.D	山口一郎

#### 【審査報告】

武藤氏は本論において、哲学上、重要な問いの一つである「時間とは何か」という問いを現象学と認知科学における「時間意識の構成」の問いへと限定して考察しようとする。いわゆる自然科学が前提にする計測される時間、客観的時間についての問いは、まずもって、現象学の方法論である、現象学的還元をとおして、カッコづけされ、まずは考察外におかれるとするのである。また、それと平行して、従来の哲学的考察に見られる「時間概念」そのものの分析に向かわうこともなく、意識に直接与えられている主観的体験として時間が、いかに意識において構成されているのかという問いを立てるのである。この問いが、本論文第一部に設定されたフッサール現象学における「時間意識の構成」の問いである。このとき、論外におかれる問いとして、いったん、考察外におかれた客観的時間にどのように、戻ってくるのか、あるいは、解明される「主観的」時間意識の解明と客観的時間との関係は、いかなるものであるのかが、問われなければならないことが、つねに、この論文の背景に潜伏していることも指摘されておかねばならない。この潜伏している問いは、第二部に展開される「ヴァレラによる時間意識の神経現象学」においても背景に留まりつづけている。というのも、そこで企てられる「現象学の自然化」において、認知科学で使用されている客観的時間がカッコづけされ、現象学的還元という方法を経るにもかかわらず、客観的時間による因果的規則性の解明としての認知科学の研究成果が取り込まれているからである。となると、その認知科学の研究成果は、どのようにして、フッサールの時間意識の構成分析と対応しうるのか、そもそも、そのような客観的時間と主観的時間の相互関係の仕方が、神経現象学というプロジェクトの成否の試金石になることが想定される

のである。

1. 第1部、第1章「時間意識の本質規則性としての過去把持」で、武藤氏は、その第1節において、フッサールの過去把持の解明にとっての前提といえる布伦ターノとマイノングの時間論に対するフッサールの批判をとりあげる。布伦ターノの時間論に対するフッサールの批判の骨子は、論者によると、「實在論的前提」つまり、外界に実在する客観的時間が前提にされたまま、主観的な表象作用一般が現に実在する現在を表象し、もはや実在しない非実在の過去とを表象作用としての連合的想像を通して結びつけようとすることで、種々の矛盾を露呈することになるとされる。その矛盾は、「現在の知覚と過去の想像という異なる表象作用の結合によって持続〔の意識〕が成り立つのだとすれば、知覚する実在的な現在と想起する非実在的な過去が、一時点において同時に存在せねばならないということになる。」(12頁)と表現され、現在と過去の表象の共在、そして、知覚と想像という表象作用の同時遂行という背理が生じてしまうとされることにある。また、マイノングの場合、われわれがあるメロディーを知覚して表象する場合、その知覚は、諸々の音という下位の対象の継起的な知覚であり、その継起の最後の局面に到達したとき、それらの音の変化の全体的統一、すなわち、メロディーという上位の対象として表象するとされる(13頁参照)。この階層的知覚のモデルに対して、フッサールは、まずは、マイノングのいう下位の時間的に配分されない、持続時間の意味をもたない音や色などの対象(感覚内容)の規定は、持続してしか与えられようのない感覚内容から時間を抽象した、抽象概念に他ならないと批判する。さらに、二つ目の批判として、継起の最後の局面(位相)という抽象的な「時間点」の想定があげられる。つまり、マイノングによれば、継起の最終位相において、すくなくとも最終位相におけるその今の下位の感覚内容の表象と上位の対象であるとして統合する表象の二つが、その最終時間点に同時に表象されなければならなくなる。そもそも下位の対象の上位の対象への統合というとき、それぞれの複数の表象作用が、時間点としての最終位相において、同時に遂行されうとするのは、時間点という抽象概念において、おのおのの表象作用そのものが、作用として働くために時間を必要としない無時間性、ないし、超時間性において成立しているという理論に他ならない。これをフッサールは、われわれに直接与えられているメロディー知覚の直接体験にそぐわない、時間点という抽象概念と瞬間的作用という観念論的立論として批判する。このようなマイノングの理論の前提になっているのは、布伦ターノと同様、實在論的前提であり、実在する対象に対応する「対象時間」とその対象を表象する内容に関する「内容時間」という二つの固有な時間系列である。この二つの時間系列は、いつも一対一対応をすることはないが、相互の依存関係にあり、武藤氏のいうように、「対象と内容が相関する限りで、対象の空間的な位置、すなわち点として観測時点を区切れれば、内容も点的に表象されてし

まうことになる。」(16) 論者のいうように、ブレンターノもマイノングも対象の存在する現在としての、瞬間の今点を前提にし、主観の表象作用をとおして、例とされるメロディーの持続した統一という意識内容を説明しようとするが、表象作用の遂行そのものに持続時間が必要とされるという意識体験の本質を無視するため、複数の表象作用が同時点に成立しようとする、矛盾におちいってしまうのである。

2. 第1部第1章、第3節で過去把持の発見が問題にされる。過去把持の発見について、従来の解釈は、武藤氏も述べるように、「統握（作用）－統握内容」の認識図式によっては、統握（作用）そのものが、持続の統一という統握内容として意識に持たされている以上、その統握内容を内容にするさらなる統握作用が必然的に要請され、それもまた、統握内容として構成されている以上、それを構成する統握作用が必要となるという、いわゆる統握作用の無限遡及という自己矛盾に陥ってしまうことから、この認識図式に先行する過去把持が発見されたという解釈である。つまり、この認識図式以前に前もって構成されている、言い換えれば、先構成されている、通常の意識作用（ノエシス）と意識内容（ノエマ）の相関関係の成立以前の先構成の領域において働く特有な、後に「受動的」と呼ばれる志向性として過去把持が発見されたとする解釈である。論者によって新たに呈示されたのは、この従来の解釈をさらに、補強する論点として、「現出論（Phänseologie）」と「意識の位相」、並びに「原意識（Urbewusstsein）」という観点である。一つの音が持続するのが聞こえるとき、感覚内容としての音が聞こえると同時に、どのぐらい持続するかも「持続の統一」として聞かれている。音を聞くという意識作用の持続が、そのまま意識されているのだが、このことをフッサールは、あらゆるコギタチオ（意識作用）が働くことそのこと自体が、「原意識」と過去把持において時間持続として明証的に体験されていると表現する。そして、このコギタチオそのものの原意識と過去把持による体験としての与えられ方は、「コギタチオをその実的な存続体に即して究明する」(24) 現出論において解明されるといわれる。ここでいわれる「実的な存続体」とは、意識に内的に体験される（内在的にともしられる）感覚位相における感覚内容を意味する。この実的な感覚内容は、継起するそれぞれの位相の経過をとおして、感覚内容が持続として統一されていく、すなわち、そのまま構成されていく経過として直接体験されているのである。この感覚内容の持続は、「持続という観念」による表象内容を意味しない。論者の指摘にあるように、フッサールは、例えば、ビール瓶の茶色の広がりやスペチエス、種概念としての茶色として表象するのではないと論じる(21頁参照)。というのも、フッサールは、感覚内容の持続そのものが、内在的時間意識に、たえず感覚位相の持続として生成しており、スペチエスとしての表象とは、そこで前もって構成されている（先構成ともいわれる）感覚内容の持続にあてがう抽象作用としての思念、すなわち、志向性（すなわち、能動的志向性）の働きであるとするからである。

この感覚内容の持続がどのように内的時間意識に与えられているかが問われるとき、想起のような意識作用の志向性ではない、過去把持という「含蓄的志向性」が開示されることになる。原意識とは、時間点においてではなく、幅のある現在、つまり、原意識的過去把持において感覚内容を構成しており、そのさい、感覚内容は、構成された志向内容が潜在的含蓄性へと変様していく、つまり、過去把持的変様が生じてくるとされる。この感覚内容の持続の、いわば、自己構成は、過去把持の二重の志向性によって説明される。感覚内容の持続は、過去把持の縦軸として表現される交差志向性において、そのつど与えられる感覚内容が、原意識的過去把持において、類似性による感覚意味内容の合致が繰り返され、その意味が潜在性として沈澱していく含蓄化のプロセスが経過する。こうして、交差志向性に重層的に類似した意味が沈澱していくことが、感覚内容という時間内容の持続の成立といえる。この時間内容の持続が、外化、ないし客観化されて、横軸に描写される「延長志向性」において、今点の連続として、つまり、どのぐらいその音が持続したのか意識されるとされる。真の持続する、時間内容の持続としての時間が、今の連続として延長する流れとして意識されるのである。こうして、時間の流れとは、そのもっとも根源的な層において、原意識的過去把持という感覚内容の持続と変化の自己生成に他ならず、これが時間流の自己構成の交差志向性と延長志向性という二側面からの解明にあたるのである。

3. 第1部第2章で、武藤氏は、「未来予持と受動的総合」をテーマとする。フッサールの『時間講義』において、幅のある現在において、過去の契機としての過去把持と未来の契機としての未来予持という志向性が呈示されている。しかし、論者のいうように、未来予持とは、過去把持に与えられる志向内容と同一の志向内容が、過去把持と逆向きに働き、開かれた未来に向けられると規定されるだけで、生き生きした現在における必然的構成要因として十分な記述はなされていなかった。それが、『ベルナウ草稿』において、厳密な現象学的記述にもたらされており、それを明確に呈示して、生き生きした現在における未来予持の役割を明確に呈示し得たのが、この論文の優れた独自性といえる。このテキスト箇所は、2012年の日本現象学会で発表され、2013年『日本現象学会年報』に、最優秀論文に与えられる「研究奨励賞」受賞論文として掲載された論文が基盤になっている。武藤氏がここで指摘しているのは、過去把持の場合、幅のある現在において充実した時間内容が空虚になっていくのに対して、未来予持は、充実される志向と充実されない志向に区別される。充実されない志向は、過去把持の志向には属さず、未来予持にのみ妥当する志向である。このことを、論者は、「しかし、この過去把持の合致に対して、充実されなかった志向内容と、それに先行する空虚な志向内容との合致は、充実の脱充実化をその能作とする過去把持によって成立することは不可能である。なぜなら、充実されない志向内容が、充実されないまま、先行した不充実の志向内容と合致するということは、充実に向かう空

虚な未来予持をとおして、はじめて可能になると言えるからである。」(44)と表現している。この未来予持の役割の指摘は、重要であり、刻々と生起する現在とは、過去把持をとおして沈澱している潜在的志向性が、空虚形態ないし空虚表象として潜在的に待機している、つまり、つねに何かを待ち構えている未来予持によって充満した意味地平の総体に他ならない。この未来予持は、武藤氏の指摘するように、「傾向意識 (Tendenzbewusstsein)」として記述され、さらにこの感性的傾向が、この様々な感性的諸傾向そのものを一つの方向に方向づける「感性的衝動」と規定づけられ、自我の関与を含むことのない受動的志向性としての「衝動志向性」が確定されることになる。この衝動志向性が、生き生きした現在の、すなわち根源的時間流の自己生成を根拠づけるとする原理的見解は、以上の過去把持と未来予持の解明をとおして、現象学的明証性にもたらされているといえるのである。

4. 第2部において、ヴァレラの「現在時間」に関する考察をとおして、オートポイエーシス論による時間意識の解明が呈示される。そのさい、ヴァレラの唱える「神経現象学」の立場が、他の認知科学のとの立場に対して明確にされる。この部分は、自然科学と哲学との方法論的考察にとって欠かせない重要な論述となっている。いわゆるすべてを実在的物理的データに還元する還元主義および計算主義は、本来の自然科学の立場設定として、原理的に大変明確であり、それだけに、意識のハードプロブレムとされる「感覚質」の謎に直面して、鮮烈なまでの無根拠さを露呈することになる。武藤氏の指摘するように、還元主義の基盤である「自然主義」に対するフッサールの批判の論述は、まさに、自然科学の使用する「論理的アプリアリ」を帰納論理的蓋然性による自然法則によって説明できるとする自然主義の自己破綻を露呈し得ている (103頁参照)。認知科学の「結合主義 (コネクショニズム)」は、「各ニューロン群のユニット全体による大域的な働きの中で表象が生じる」(77)とされ、「感覚—反応」の学習過程が加味された複数のニューロン群による並列分散処理をその特徴とする。このニューロン群の連結をとおして表象が「創発する (エメルゲンツ)」するとされる (78頁参照)。これに対してヴァレラは、「創発」をイナクシオン、すなわち「行為 (感覚運動)」をとおして、つまり、「有機体の持つ身体感覚系と運動系の法則的な連関によって構成される行為による認知の産出」(84)によって明らかにしようとする。脳神経システムと環境システムという両システムを接合しつつ媒介する身体システムに焦点をあて、媒体としての身体が「前者から主観的な身体具体的な記述における不変項の抽出と、後者から客観的なシステム間の接合と組織化を記述するための力学的な道具立てを用いる」(同上)ことを可能にしているとみなすのである。この発想がヴァレラの神経現象学の骨子とされる。他方、神経現象学が「現象学」という表題をもつには、他の不可欠な側面が呈示せねばならない。そのさい、ヴァレラはJ.R. サールの現象論が「意識の還元不可能性」と「意識の事実」の主張にとどまり、方法論を欠い

ていると批判し、現象学が現象学であるための必要条件として、方法論としての「現象学的還元」を主張している。ヴァレラは、現象学的還元こそした生命科学の研究法を、「現象学的還元という態度」、「直観の親密性」、「記述の不変項」、「安定性の訓練」という四つの側面から詳細に描いている（91頁から95頁まで参照）。現象学的還元の態度とは、日常生活における感覚や思考の経験に関して、その経験に経験を重ねることをせずに、そのつどの経験をひとまず、カッコにいれ、そこで意識に直接与えられるがままの経験に差し戻す（還元する）態度を意味する。この還元をとおして、自然な生活態度で経験されている自分の「自動的思考パターン」に気づくことが可能になる。直観の親密性というのは、フッサールのいう「本質直観の明証性」を意味する。現象学的還元を遂行して、直接的意識体験の現場を確定し、そこで、意識内容が意識作用をとおして構成されている構成のされ方が、そうとしてしか考えられない、必然的で疑念の余地のない明証性（必自然的明証性と称される直観のあり方）において与えられ、その与えられている明証性の内実が、さまざまな意識作用の連関や感覚形態の形成の解明をとおして、十分に、また十全的に解明されるとき（十全的明証性にもたらされるとき）、その意識内容の本質直観が獲得されるといわれる。ヴァレラは生命科学研究者に、事象についての各自の本質直観を要求するのである。記述の不変項とは、本質直観にもたらされた意識の相関関係の内実が、言語や記号による記述の不変項として表現され、それによって客観的に共有されることを意味する。これら現象学的還元の全体を一貫して遂行するためには、そのための訓練と熟練が必要であるとするのが、「安定性の訓練」という側面である。たとえば、時間意識を考察するさい、計測する時間の道具的使用を自明とする自然科学研究者にとって、直接的意識体験としての時間意識に還元する態度は、これまでの考察方法の根本的捉え直しとしてしか遂行しえない根本的転換を迫られることになり、ヴァレラのいうように、「研究者たちの共同体による鍛錬に向けた参加」が不可欠になるのである（93頁参照）。

第2部第5章では、現象学の自然化の問題が取り扱われる。「現象学の自然化」というのは、ヴァレラの提唱する「神経現象学」にあつて、神経科学を含めた認知科学と現象学の相互制約、ないし、相互補足関係における、認知科学が現象学に対してもつ制約性、補足性を意味する。両者の相互制約は、「両方の記述の共同規定を強調することによって、それらの記述の間の架橋、異議申し立て、洞察、そして矛盾を探索し得ること」（97）であるとされる。現象学の認知科学に対する現象学的還元の要請は、明確であるとして、認知科学が現象学に対する制約と補足性の内実を、現象学的分析で解明される体験内容を「数学や力学系に関する様々なモデルを道具立ててとして用いる」（100）ことで、「間主観性と間身体性を根拠にした上での数学化という三人称的な公共的コード化」（101）を目的とするとされる。この試みに対して、『ヨーロッパ諸学問の危機と超越論的現象学』の自然主義による「自然の数学化批判」を取り上げ、自然科学の探求に対して、「超越論的次元」

を対立させる現象学者 D. ザハヴィの批判は、論者もいうように、あまりに短絡的であり、現象学の探求を自然科学の探究と分離した、学際的探求の可能性を閉じてしまう狭隘な解釈とされねばならない(102頁参照)。武藤氏はこれに対して、『イデー II』で呈示される領域的存在論を踏まえ、身体構成を介して位置づけられる事物構成の領域が確定され、ギャラガーのいうように、「数学的な形式化が経験からの抽象を含むのなら、内容のある、力動的な (dynamic) 経験とは何かを正確に理解することが重要であり、そのことから出発することが重要である」(112) としている。

第2部第6章では、ヴァレラの展開する「時間意識の神経現象学」が紹介され、認知科学と現象学の相互補足性が、もっとも効果的に働いている事例が示されることになる。そこで特徴的なことは、フッサールによって示される過去把持の交差志向性において働いている受動的総合としての連合や触発（両規則性は、原意識的過去把持という必然的明証が未来予持の解明をとおして十全的明証にもたらされたものといえる）が、ヴァレラによる神経細胞アセンブリ（神経細胞集団）の「発火から統合、そして弛緩までの一連のプロセス」(120) である時間の 1 スケールに相応するとされる。さらに、武藤氏は、ヴァレラが、フッサールの過去把持と未来予時に関係づけて、「フッサールによって提案された〔過去把持の〕二重の志向性の一般的な構造は、私が思うに、力学的なプートストラップ〔展望〕というこのクラスのものである。〔未来予時に関わる〕触発と情動調整の分析は、このことに対して証拠を与え得る」(135) としていることを指摘し、ヴァレラの神経ダイナミズムによる時間分析とフッサールの時間分析の対応関係を的確に提示している。

このヴァレラの神経現象学における時間分析は、ヴァレラによる「新たな時間図式」の考察において、その特質を明らかにしている。この新たな時間図式は、フッサールの過去把持の二重の志向性である交差志向性と延長志向性を力動的神経ダイナミズムの構造にそくして活用したものである。フッサールと同様、ヴァレラにおいても、縦軸に描かれた交差志向性が時間そのものの生成の起源を示している。フッサールにおいて過去把持の交差志向性をとおして時間内容（たとえば音や運動感覚などの感覚質）が、類似性とコントラストによる連合と触発という受動的総合の規則性をとおして成立するとされる一方、ヴァレラにおいては、この縦の志向性（交差志向性の別称）が「発生的構成」と呼ばれて、発生的根拠としての「自己運動の内在的時間化」(138頁参照)、すなわち内在的触発的素因をとおして「客観—出来事の創発」(137) が生じているとしている。フッサールにおいて過去把持の延長志向性をとおして時間の流れが生成するとされ、そのつどの今の系列が過去の方向と未来の方向に描かれている。これに対して、ヴァレラは、この横の志向性を「静態的構成」と呼び、過去把持的流れと未来予持的展望と性格づける。たしかに横の志向性を「静態的」とし、縦の志向性を「発生的」とする規定は適切といえる。発生的構成において、時間内容そのものの構成が、神経細胞アセンブリの 1 スケールの統合と弛緩を

とおして（フッサールに即せば、過去地平に含蓄的志向性として潜在する空虚形態ないし空虚表象と原印象とのあいだの受動的綜合としての相互覚起をとおして）まさに生起し（出来事として創発し）、その結果として出来上がり済みの静態的構成として、過去の今の系列と未来の今の系列が静態的過去と静態的未來とみなされうからである。しかし、ヴァレラの記述において、不適切とされねばならないのは、過去把持的流れを静態的過去の横軸に描くことである。フッサールの時間図式で描かれる二重の志向性は、まさに、過去把持の二重の志向性なのであり、縦軸に描かれた過去把持の交差志向性において連合による合致をとおして構成された時間内容が、過去把持にもたらされる。こうして次々に構成される時間内容は、そのつどの過去把持をとおして交差志向性に沈澱していくように描かれることで、この縦軸には、時間内容の生成の順番に、より以前の過去把持の上により以後の過去把持が重なるようにして、そのつどの時間位相に、時間内容の沈澱による過去把持の沈澱層の積み重なりが成立するのだ。したがって静態的な過去把持の流れを横軸に描くことは認められても、縦の志向性における内在的触発的素因は、まさに過去把持の志向性をとおしてしか、生成し得ないこと（発生しえないこと）が見落とされてはならないだろう。この点、武藤氏の論述は、ヴァレラの時間図式の基本的枠組みの適切な論述とはいえども、批判的考察としては不備があるといわねばならない。

口頭審査にさいして、上記の不備な点と、この審査報告の冒頭に述べられた、自然科学研究が前提にする客観的な線状的時間軸（一方向の→が、 $-t$ ,  $0$ ,  $+t$ と分けられて表記される）の発生の問いが展開されていないことが指摘された。これらの点が加味された、間主観性および間身体性の観点からする「時間意識の神経現象学」が武藤氏にとってこれからの大きな課題といえよう。

これまで述べられてきたように、本論文は、もっとも厳密な学としてフッサール現象学と認知科学としての神経科学とを方法論的考察を介して、両者の相互依存性、ならびに相互補足性を、時間意識の生成を事例にして解明し得た優れた論文と言える。本報告をもって、この武藤氏の論文は、本学博士学位を授与するに相応しいものと判断する。